

氏 名 (本籍)	玉 井 紀 子 (広 島 県)			
学 位 の 種 類	博 士 (ヒューマン・ケア科学)			
学 位 記 番 号	博 甲 第 6566 号			
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 25 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科			
学 位 論 文 題 目	児童養護施設におけるリービングケアに関する研究			
主	査	筑波大学教授	博士 (心理学)	庄 司 一 子
副	査	筑波大学准教授	博士 (学術)	水 野 智 美
副	査	筑波大学准教授	博士 (医学)	森 田 展 彰
副	査	筑波大学准教授	博士 (人文科学)	安 藤 智 子

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

日本の社会的養護の大部分は児童養護施設が担っている。国内外を問わず社会的養護やケア制度で生活していた人々の予後は必ずしも良好ではないことが示されており、児童養護施設入所の高齢児童の退所後の自立、社会適応に向けたケアの必要性が指摘されるようになった。

日本ではこのような自立生活を意図したケアは、施設内ケアと退所後のケアの間に位置し、「リービングケア」と呼ばれ、重要性が指摘されるようになっている。しかし国内では重要性が認識されつつあるものの調査は少なく、リービングケアの実態はまだ明らかではない。本研究は、児童養護施設の高齢児童に対して社会生活の準備を目的で行われるリービングケアの実態を明らかにし、予後と関連ある要因を同定し、よりよい予後をもたらす児童養護施設での支援を検討することを目的とした。

(対象と方法)

研究は二つ行われた。研究 1 は 148 名の児童養護施設生活担当職員を対象とし、中高生に対するリービングケアに対する認識、実践内容、社会的自立を妨げている要因、さらに必要な支援、必要な支援体制を質問紙調査によって明らかにした。研究 2 では、58 名の児童養護施設生活経験者を対象とし、予後としての主観的 well-being、職員との関係、施設入所中に提供されたリービングケア、施設生活に対する満足感に関する質問紙調査を行った。さらに、社会的自立を妨げている要因、必要な支援、必要な支援体制についての職員と生活経験者の比較検討を行った。

(結果)

研究 1 の職員に対する調査から、中高生に対するケアに自信がない、困難とする回答が多かった。提供されているリービングケアは、因子分析から『情報提供』、『職員との交流』、『子ども間の交流』の 3 つが抽出された。『職員との交流』は、施設環境と、『情報提供』は施設環境やリービングケアへの認識と関連が見られた。研究 2 の児童養護施設生活経験者に対する調査から『職員との交流』や『子ども間の交流』ケアが多く提供されていた。また 3 因子は施設生活に対する満足感と正の相関、職員との良好な関係は提供されたリービングケアや施設生活満足感と正の相関が認められた。施設生活予後の主観的 well-being は施設生活に対す

る満足感、提供されたリービングケアと正の相関が認められた。

以上より、職員と子どもの良好な関係やケアの提供は、施設生活への満足感を高める上で重要な役割を果たしており、入所中に具体的なケアを提供することは予後に影響を与えることが示され、ケアの重要性と有効性を示す所見が得られた。また、ケアを提供する側（職員）とケアを提供される側（生活経験者）で、社会的自立に必要とされる支援の認識に相違が認められ、これらの結果を元に、制度上の改善も含め、今後よりよい自立を促進するための支援、リービングケアにおける現場への示唆が示された。

（考察）

児童養護施設において、ケアに携わる職員は中高生への対応に苦慮していることが示され、専門職員の活用、児童相談所との連携強化など職員へのサポート体制が必要であることが示唆された。教育に関する支援や、『職員との交流』ケアは、比較的現場で提供されているケアとなっていたが、支援体制の見直しなどがリービングケアを充実させるためには必要であることが示唆された。

『職員との交流』ケアや、『子ども間の交流』ケアは、職員と子どもの関係性を構築し、対人関係の基盤を作る上でも、予後にも影響を与える重要なケアであり、これらのケアとともに、『情報提供』ケアなど、自活生活の準備に特化したケアが提供される必要性があることが示唆された。退所後も数年にわたってこれらの具体的なケアを提供されたことが主観的な幸福感に有効であることが示されたことは、入所中に具体的なケアを提供することの重要性を示す所見が得られたと考えられる。また、養育者との関係はケアを提供する上で重要な要素となっていると考えられた。

本研究は探索的、回顧的研究でもある。今後はリービングケアのさらなる充実のために施設内でケアを実際に受けている中高生に対する調査を実施する必要がある。また、第三者による評価、客観性、信頼性を高める調査の工夫を行い、ケアの質の向上をさらにめざすことが求められる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

児童養護施設での生活、出所してから社会で自立した生活の実現に向けたリービングケアは、非常に重要なケアであると考えられるがその実態は明らかにされてこなかった。本研究は、日本において研究があまり行われていない児童養護施設のリービングケアに関する先駆的、探索的研究として位置づけられる。さらに関係の施設職員、退所した施設生活経験者に質問紙調査を実施し、その実態、well-being、満足感に影響を与える要因などについて統計的に検討を加え、施設でのケアを明らかにした点で意義ある研究と認められ、高く評価される。

平成 25 年 1 月 25 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。